
君に逢いたい

shiraka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に逢いたい

【Nコード】

N3846BA

【作者名】

shiraka

【あらすじ】

薄暗く、怪しげな空気の漂う廊下を二人で歩いていた。そこで二人を待っていたのは、浮島に残る校舎の解体工事の度に問題を起こす原因だった。

別サイトにて掲載中（重複掲載）です。

私達は、妖しげなお札の貼られた扉の前で少し戸惑っていた。

いかにも「何かありますよ」という感じがひしひしと伝わってくる。

一呼吸置いて、彼がそつと扉に手を掛けた。

私は見えない何かに虚勢きよせいを張るように身構えたが、何かが飛び出してくることはなく、ほつと息をついた。彼の肩越しに部屋の奥を見ると、紅い二つの光がじつとこちらを見ていた。

「――ッ」

驚いて言葉を発せない私の足元をその光は風を引き連れるように、さつとすり抜けていった。

啞然あぜんとする私をよそに、彼は納得したように何度か頷くうなづ。

「そうか、アレが原因だったか。確かに、こういう場所なら有り得るな」

「えっと、どういうこと？ さっきの、どう見ても猫だったけど」

「そうだな。猫の形をしていたが、アレは本物の猫じゃない。この校舎に残る色んな記憶と想いが具現化したものだろう。それがここを守るように作用してるんだと思う。とりあえず、追いかけるぞ」

そう言うと、彼は走り出した。まだ理解出来ていない私は置いていかれないように後に続く。

長い廊下を駆け抜けて、彼は真っ直ぐ出口へと向かう。何故、迷いなく走れるのか私には判らなかった。

校舎の外は広い校庭と空だけだった。ここは浮島なので、地面の外側は全て空なのだ。

今まで暗い室内にいたので、太陽の日差しが眩しくて私は少し目を細めた。

「……いた」

彼の視線の先を見ると、アレは綺麗な姿勢で座り、楽しそうに嗤^{わら}って尻尾を振った。

「あの仔が、解体工事の度に怪我人を続出させてる原因なんだよね？」

「だろうな。この浮島で意思を持つ者は俺達以外にはアレだけだろう。ここが閉鎖されてから、既に数十年過ぎている」

「……ずっと、独りぼっちだったのかな」

彼が呆れたように微笑^{わら}った。

「遊び相手が欲しいだけなのかもしれないな。少々、やり過ぎな気はするが。とにかく、捕まえるぞ」

彼が駆け出す。

はっと、私は息を飲んだ。

その光景をどこかで見たような気がしたのだ。ずっと前に、同じように彼が走り出し、その後ろ姿を追って私も走った。何かの為に、そして、私は……彼は……。

そう、私はこの未来を知っている。

私は彼の後を追った。

アレはその場から逃げることもせず、ただ尻尾を振っている。まるで、私達を呼んでいるようだった。

彼は真っ直ぐ進んでいく。

でも、その道筋が嫌な未来に繋がっていることを知っている私は、彼を呼び止めようと声を上げたが前に行く彼には届かない。

追い付くように必死に足を動かし、私は彼へと手を伸ばした。

——あの時と同じように。

彼の背に触れ、押し飛ばすはずだった。それで、助けられるはずだった。

しかし、彼はふいに反転して、逆に私をそこから押し退けたのだ。ガシャンッ、と甲高い金属音が鼓膜を揺さぶる。

地面に膝をつけた私の目の前で、彼の足は鈍く光る足枷あしかせのようなものに捕らわれていた。

あの時と同じ光景。

私はまた、彼を助けられなかったのだ。

今回は知っていたのに、起こることを判っていたのに。

助けることが出来なかった。

彼に走り寄り、その足を捕らえる金属に手を伸ばす。氷のように冷たいそれは、どんなに力を込めても、彼の足を離してはくれなかった。

俯うつむく私に、彼は呆れたように優しく微笑み、そつと頭を撫でる。

確かな温もりが離れるとふいに世界が闇に呑まれ、全てが真っ暗になった。次第に明るさを取り戻し、次に私の視界に広がったのは見慣れた自室の天井だった。

数年前にこの夢を見た。

二人で歩いていて、猫みたいなのがいて、彼はアレに捕らわれた。

そしてまた、同じ夢を見たのだ。

だから、助けたかった。結果を変えたかった。

そこに私がいたのは、その為だと思ったから。

だけど、また繰り返してしまった。

もう一度、夢で君に逢えたら、今度こそ助けるから。

いつか、本物の君に逢えるなら「ありがとう」と伝えるから。

どうか、もう一度君に……。

そっと目を閉じると、冷たい雫が溢れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3846ba/>

君に逢いたい

2012年1月9日23時49分発行